介護現場における性的マイノリティ利用者との出会いと職員に求められる姿勢

－居宅サービス2事業所の管理者へのインタビューを通じた一考察－

○認知症介護研究・研修東京センター　佐々木 宰（009393）

キーワード：性的マイノリティ・尊厳・個別性

１．研 究 目 的

近年、LGBT（レズビアン、ゲイ、バイセクシュアル、トランスジェンダー）など性的マイノリティへの権利保障、福利厚生の充実等の取組みが活発化している。また筆者や関係者の周囲では、がセクシュアリティをオープンにして介護サービスを利用する高齢者（以下「利用者」とする）が増えたり、利用者がカミングアウトせずとも専門職側が気づき、プライバシーへの配慮からどこまで踏み込むべきか葛藤するという話も聞かれている。

性的な要素は個人の尊厳にかかわる一方で重要なプライバシーでもある。介護は利用者の私生活に立ち入って身体接触を不可欠とする職業でありながら、むやみに立ち入ることで個人の尊厳を冒しかねないという両側面を持っている。そこで本研究では、多様なマイノリティ要素をもつ利用者との「向き合い方」や「尊厳の保持」に向けた介護のあり方（利用者と向き合う姿勢や個別性の理解）について示唆を得ることを目的に、指定居宅サービス事業所の管理者2名に対してインタビューを行った。

２．研究の視点および方法

インタビューは、訪問介護事業所所属のＡ氏（40 代男性）、小規模多機能型居宅介護事業所所属のＢ氏（30代男性）に協力を得て、2018年3・4月に1人1回ずつ90～120分で実施した。半構造面接法で行い、同意を得て録音し逐語記録を作成した。主な内容は「私生活における性的マイノリティの認知経験」「介護現場における性的マイノリティ利用者（そう思われる人も含む）認知経験と対応」「今後受け入れる場合に予測される自身の対応／所属・管理するチームの対応」「その他」である。分析は、SCAT（Steps for Cording and Theorization）の手続きを参考に、逐語記録から、自己と異質な要素を持つ他者としての利用者と向き合う上での姿勢に関する語句に着目し、「データの中の着目すべき語句」「それを言いかえるためのデータ外の語句」「それを説明するための語句（テクスト外の概念）」「そこから浮き上がるテーマ・構成概念」の4段階で抽象化を行った。

３．倫理的配慮

日本社会福祉学会研究倫理規程を遵守して実施した。両氏に研究の主旨、研究協力の任意性、個人情報の保護及び結果公表時の匿名性の確保について書面で説明し、同意を得た。

４．研 究 結 果

Ａ氏の語りから、同性愛者であることをオープンにして申込のあった男性利用者への対応に関するエピソードを取り上げる。それまで同性愛者と出会ったことがないＡ氏は「どう扱ったらよいかわからず戸惑った」が、「同性介護の原則に則って男性ヘルパーを派遣」することにした。若手の男性ヘルパーは「何をされるかわからない」と「身構え」、恐る恐

る訪問したものの何もなく「拍子抜けするくらい普通」であり、「今でも継続して担当」し、冗談を言い合えるような関係を築いているとのことである。このエピソードにおける「テーマ・構成概念」を【過去の経験や既存の価値観の通じない利用者との出会いに対する戸惑い】、【既存の基準を準用】、【外見上の性別で判断】、【根拠のない漠然とした不安】、【実際の経験の積み重ねによる相互理解】に整理した。

Ｂ氏の語りから、男性職員に対し性的逸脱とも取れる行為を繰り返す男性利用者のエピソードを取り上げる。当時新人だったＢ氏は「そういう人が身近にいなかった」ので戸惑いながらも、専門職としてその人のニーズと代替的なアプローチを探ろうとしたが、試行錯誤の連続だった。力なく同じ訴えを繰り返す様子を「とろとろと沁み出るように訴えを繰り返す」と表現し、その姿にかかわるＢ氏も苦しくなったという。一方で本人を侮蔑する態度を取る職員もおり、結果として満足のいくケアはできなかったが、同期の職員とさまざまな葛藤を語り合い、視野を広げられたことが今の自分の糧になっているという。このエピソードにおける「テーマ・構成概念」を【不可視化されていた存在に関心を寄せる】、【拒絶反応・差別的対応】、【行動背景、ニーズを探る】、【戸惑いを共有できる職員関係】、【代替的アプローチの限界】、【評価・検証の困難さ】、【根源的ニーズ】に整理した。

５．考 察

２つの事例は、出会った当初には不安や戸惑い、あるいは先入観等が生じたものの、セクシュアリティ如何にかかわらず人として当たり前に接する（接しようとする）姿勢が共通している。しかし、かと言って個々の生活背景やニーズを洞察・理解するための性的マイノリティに特化した知識がなければ、無意識に利用者の尊厳を冒す可能性もある。

荒木乳根子は高齢者のセクシュアリティについて「職員の理解のいかんでケアのあり方が大きく変わってくる。また、職員の人間理解と共感性のありようが大きくかかわってくる」という(荒木 1995:250)。しかし多くの介護職にとって性的マイノリティの利用者は、過去の経験や既存の価値観では十分に洞察・理解しきれない存在であり、一般の高齢者以上と接する以上に戸惑いや葛藤を抱くと思われる。

一方性的マイノリティであるという要素自体は、多くの場合、歩行や排泄といった身体動作に影響を与えない。そのため画一的な身体介護を行い個別性を無視したかかわりをすることも、実際には可能である。しかし「高齢者の性の問題は、どのように人間らしく幸せに暮らすかという、高齢者自身の問題」（御園・杉澤 2015:25-37）と言うように、性的な要素は個人のアイデンティティや人生全体にかかわるものであり、この点を介護職がどう理解し、チーム・組織として行動するかは利用者のＱＯＬや尊厳の保持、そして介護サービスの質を左右する。つまり、当事者と出会った後に専門職としてどう向き合い、ほど良い関係を築きながらどう相互理解を深めていくかという過程が問われていると言える。

文献　荒木乳根子（1995)『【事例集】高齢者のケア⑥性と愛―セクシュアリティ』中央法規出版.

御園一成・杉澤秀博（2015)『日本人成人の高齢者の性に関する知識』老年学雑誌(6).